

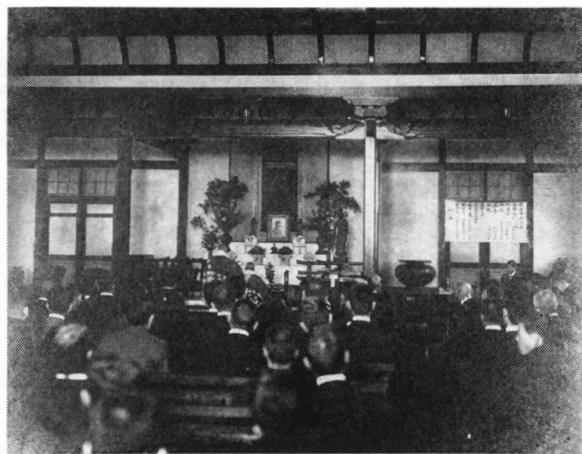
次で翁の令孫たる木村武山氏令嬢の手によりて除幕せられ、木村武山氏の挨拶にて、式を上野精養軒に於ける午饗會に移したるが、席上高村教授莊重の辭を以て故翁の徳を頌し、また笹川臨風氏の卓上演説あり頗る盛會なりき

なお、遺作展覽会主催者は大正六年五月『光明作品集』を刊行した。これには光明の略年譜と主な作品が掲載されている。

④ 岡倉覚三死去

大正二年九月二日、もと本校校長岡倉覚三は新潟県赤倉の山荘で死去した。晩年の岡倉はポストン美術館中国日本部部长(明治四十三年就任)として日米間往復の生活を続け、その間、ポストン美術館の美術品購入のため中国やインド、ヨーロッパを旅行し、日本では古社寺保存会や美術家たちのために尽くすなどした。彼は賢臓病が悪化したため、大正二年三月に帰国。同年八月には病をおして古社寺保存会に出席し、法隆寺金堂壁画保存について提案した後、俄かに重態に陥り、死去した。葬儀は九月五日に谷中斎場で約六百人参列のもとに行われ、染井墓地に埋葬された(九月、五浦に分骨)。次いで十月二十日にはポストンのガードナー夫人の音楽堂で追悼會が開かれ、また、翌十一月十五日には本校講堂で追悼會が開かれた。

本校における追悼會の様子は『東京美術学校校友会月報』第十二卷第六号の「芸苑叢報」欄と、同第七号の「祭祀」の欄に大きくとり上げられている。後者は「故岡倉先生追悼會の記」と題する詳細な記事で、追悼會案内状(発起人百五十六名名簿を含む)に次いで式次第



岡倉天心追悼會

が次のように記されている。

式場は東京美術學校の講堂と定めらる。乃ち講堂中央の壇上を迎神の處と爲し、祭壇正面に法隆寺所藏の法相曼荼羅を掲げ、其前に故人の遺影を安置し、右側に故人

が生前信仰せられたる快慶作彌勒菩薩像及經卷を据え、香花供物等は法の如し。本誌に挿入せる寫眞は即此有様を寫せるものなり。來會者陸續として踵を接し、時は午後一時三十分を過ぎぬ。是に於て司會者正木直彦氏は開會の辭を敘べられ、嚴かにその式を執行せられたり。乃ち左の如し。

追悼會式次第

開會挨拶	正木 直彦氏
作善講	講師大僧正 佐伯 定胤師
諷 誦	大僧正 大西 良慶師
散 華	佐伯 良謙師

註記 千早 正朝師

遺族焼香

來會者一同禮拜

追悼文 男爵 濱尾 新氏

追悼文 男爵 九鬼 隆一氏

追悼文 門人總代 横山 大觀氏

以上

當日來會者は總て百九十二名、遺族としては、令夫人もと子、令嗣一雄、令弟由三郎等の諸氏、九鬼男爵の追悼文は黑板（勝美）博士代讀せられ、講師法隆寺貫主佐伯大僧正以下の四師は、態々奈良縣法隆寺より上京せられたるなり。

次で佐伯大僧正の表白文と大西大僧正の啓白文、浜尾、九鬼（代読）、横山の追悼文が掲載されており、式後、精養軒で晚饗会が開かれ、百余名が出席し、正木直彦の挨拶、三上参次、有賀長雄、三宅雄二郎（雪嶺）の追憶談、黒板勝美による記念事業計画の提案（万場一致可決）、岡倉由三郎の謝辞等があったと記されている。昭和六年に至り、本校校庭に平櫛田中原型の岡倉天心銅像が建てられた。

⑤ 依嘱製作中央停車場壁画

年報（32頁）に記載されているとおり、大正二年、本校は鉄道院東京改良事務所より中央停車場（大正三年十二月十八日開業式挙行。東京駅と命名される。）の壁画製作を依託された。「大正二年 職員ニ関スル書類 庶務掛」によると、同年三月、黒田清輝に「中央停車場本

屋中央広間壁画工事監督」を囑託したい旨、鉄道院より文部省に照会があり、次いで文部省より本校へ照会があつて、本校の依嘱製作事業の一環として行ふことになったことがわかる。完成は翌三年八月で、その翌月に発行された『美術新報』第十三卷第十一号に和田英作の「竣工したる中央停車場の壁画」と題する報告が載っている。それによると、黒田は「山の幸」「海の幸」というテーマで鉄道院側が用意した下図に対し、一応そのテーマに倣つて別の案を立て、大正二年秋に下図を描き（東京国立文化財研究所所蔵の写生帖にその画稿があり、『黒田清輝日記』第三卷。（昭和四十二年。中央公論美術出版）に図版が掲載されている）、それをもとに和田英作と西洋画科卒業生の田中良および五味清吉が手分けして材料を集め、大正三年正月に五分の一の下図を作り、同年三月頃からモデルを使って現画（油画）の製作に取り掛つた。七月末に「山の幸」を意味する「機関手」「農業」「鉱業および林業」「工業」「操車」と「海の幸」を意味する「舵手」「水産」「運輸および造船」「漁業」「水難救助」の油画十点が完成し中央ホールの奥の室に取り付けられという。同誌にはそのうち六点の図版が掲載されている。この壁画は戦災で焼失した。

⑥ 『法隆寺大鏡』

大正二年十一月から本校は『法隆寺大鏡』の刊行を始めた。美術の宝庫たる法隆寺の研究、記録のために率先して大図録を編集刊行することを決定した本校は、黒板勝美、三宅米吉、今泉雄作、中川忠順、溝口禎次郎らを顧問に迎え、白石村治を編集事務囑託とし